

山梨 よっちやばれ!

やまなしライフサポート

困窮者に炊き出しのぬくもり



炊き出しは品数が多く、定食のように並べられている＝甲府市中央2丁目

やまなしライフサポート 約70人の会員の他にボランティアがいる。炊き出しや見守りパトロール、ライフ荘の経営など、生活困窮者の発見から自立支援まで取り組んでいる。問い合わせは事務局(055・241・2545)へ。

ボランティア・食材・情報募る

毎週木曜の炊き出しや、見守りパトロールを手伝うボランティアを募集している。また、炊き出しに使うことのできる量の食材の寄付も募っている。事務局の菅沢信さんは「身近に生活に困っている人がいれば、炊き出しなどの情報を伝えてほしい。また、私達にも困っている人の情報を教えてほしい」と呼びかけている。



中山八十司理事長

参加している木村正子さんは「世間で『年越し派遣村』が話題になり、私達にも何かできることがないかと考えました」と振り返る。生活困窮者に温かい食事をふるまうため、寄付を募ったり、炊き出しに来るよう呼びかけるチラシを配ったりしたという。10年から毎週炊き出しをするようになり、11年にNPOに登録された。

ライフサポートはこのほか、生活保護の仕事が決まるまで一時的に住むことができる「ライフ荘」(管吹市)も運営。13年から17年9月までに約170人が利用した。中山八十司理事長(77)は「ライフ荘を通じて、人間関係を回復し、人生再出発の足がかりとなっている」と話す。

ライフ荘利用者は中高年以上が多かったが、最近では20、40代が急増。「異常事態だ」と中山理事長は言う。非正規雇用が増え「派遣切り」などで誰でも職を失う可能性がある。一方、家族や親族、地域の支合いは希薄になった。若者は住む場所を失っても自分から助けを求めず、マンガ喫茶や24時間営業の温泉施設でぎりぎりまで耐える傾向があるという。その結果、困窮状態に陥ってしまう。

支援のためにまず必要なのは、困っている人を見つけることだ。中山理事長は「孤立し、困っている人は多い。そういった人にもっと温かいまなざしを向けられる社会になれば」と話している。

(黒石直樹)

1月18日木曜日。日暮れが近づくと、甲府市中央2丁目のカトリック甲府教会の講堂に続々と人が集まってきた。路上生活者ら生活困窮者を支援するNPO法人「やまなしライフサポート」が毎週実施する無料の炊き出しに訪れた人たちだ。

この日のメニューは、わかめご飯とみそ汁、鶏肉のハンバーグ、里芋の煮物、大根とにんじんのサラダ。「このご飯がいいな」「うん、うまい」。そんな会話をしながら、集まった28人は約60人前をあっという間に平らげ、カップ焼きそばなどの「お土産」を大事そうに持ち帰っていった。

事務局長の菅沢信さん(63)は「多い時は毎週60人くらい来ていたのだから、これでも少なくなった」。講堂では看護師や就労支援のカウンセラーが相談に乗るため、「最近では食べる前から集まるサロンのようになっています」とも。15人ほどのボランティアは手際よく、調理や配食、片付け、掃除をこなしていた。

やまなしライフサポートの炊き出しは2008年のリーマン・ショックをきっかけに始まった。当初から